

年間第30主日

第一朗読 シラ 35・15b-17、20-22a  
第二朗読 ニテモテ 4・6-8、16-18  
福音朗読 ルカ 18・9-14

2019.10.27

高円寺教会 9:30 ミサ

豊島 治神父（東京教区）

今日の福音ですが、二つあると思います。この二つのどちらの意見が正しいのかって言うわけにもいかないですね。この「十分の一を収め、断食もして、そして苦しい人のためにこのことをしています」とそういうふうにする人と、そして、「罪人のわたしを憐れんでください」という、この二人の人を、どちらが良いか悪いかって言うと、「後者だよ」とは言うものの、でも、このやっていること自体は否定しているわけではありません。

では、それをどのように捉えていくか。二つあると思うのです。一つは、上から目線であることの非難、それが「うぬぼれ」ということばで福音書には書かれている。そういうところでは、褒めているわけではない。もう一つ、この前者と後者の間で問題とされる場所はどこでしょうか。このたとえ話の中で、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と胸を打ちながら祈った徴税人の、このところにまた注目が集まっていくようです。徴税人はその当時ユダヤ人でありながら異邦人のように蔑まれて、卑しめられて、見下されていた。このファサイ派の人の立派な祈りではなくて、こういうふうにする徴税人を天の父は良しとされた、神様に愛されるものだ、そういうふうになされた。罪人のこの特徴的な徴税人の祈り、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」という祈りは、旧約聖書の有名な詩編 51 番の冒頭の言葉と同じ言葉であります。ご存知のように、ミサは第一朗読の流れを受けて、答唱詩編というのが付いています。今回選ばれている答唱詩編の詩編は 34 番のところであります。これもまた第一朗読の中の趣旨をもっていて、四つ目の段落に、苦しい人に対する励ましの言葉が入っています。

新約聖書、特に福音書は、アレルヤ唱が冒頭の導入句になるわけですがけれども、新約聖書の今日取り上げている「神様、罪人のわたしを憐れんでください」という 51 番の冒頭の言葉を拾っていくと、深いものがあるわけです。イエス様

の時代のユダヤ人たちは、小さいときからみんな詩編を歌って暗記していました。だから、聖書を出してみると、詩編の言葉がいろんな所で出てくるわけですが、すけれども、ちょっとでもそのフレーズを拾っていくならば、「あ、あの一編が出ています。ということは、この全体の何編のことを言っているんだ」、そういうふうに思うわけです。わたしたちが子どもの頃に『雨にも負けず』を覚えたように、あるいは、掛け算の九九を覚えたように、それが諳んじてフラッシュバックするみたいな、そういうところがあるわけです。だから「あの詩編の言葉だな」というふうに分かった。この詩編 51 の終わりのほうに、非常に有名な祈りの言葉があります。それは、「神様に受け入れられるいけにえは砕かれた魂」、「神よ、あなたは砕かれ悔いる心を見下されることがない」（詩編 51・19）そういうふうな締め方で 51 番は締めくくられています。「砕かれた心」とは、「砕かれた魂」とはそういうものか。この献げ物が、この当時は当然動物とかあるいはすごく良い物、きれいな物をささげていましたけれども、神様はそういう献げ物よりも砕かれた魂の献げ物を受け入れられる。このイエス様のたとえ話は、徴税人は砕かれた魂を持っている、そういうふうにイエス様はお考えになったと考えられます。

先日の台風 19 号において、多くの被害が発生しました。マスコミも全部を取り上げられないほどひどいところです。状況を報道するテレビも混乱しているっていうふうに分かりますけれども、このあいだ、テレビで「南相馬から中継です」という映像が広がりました。カトリック東京大司教区は南相馬に「カリタス南相馬」というのを作って、今、幸田司教さんが常駐して、そこから多くのシスターの支援を受けて動いていますけれども、その南相馬が映ったときに、ねじり鉢巻をして片付けている人が映りました。2011年に起こった 3.11 で全部やられてしまって、そして畑を一からやり直して、またローンを組んでコンバインを買って、そして倉庫も作って、やっと収穫がトントンになってきた、そう思ったときに、また水でやられた。そういうふうな報道でありました。ねじり鉢巻のおじさんは、名前も忘れちゃってるんですけど、とにかく元気で、人に会うと励まして、そして東京から行くと「よく来た」と言って作物をくれて、そんな元気をくれる人でした。その人が映ったわけです。もう一回、テレビ画面上でわたしは見るということがあったわけです。そして、「頑張らないとな」、そういうふうにテレビ画面に向かって言いました。「俺は畑をやられて

けれども、命を落とした人もいる。だから、俺は頑張るんだ」っていうふうに、「まだまだやっつけていける。俺はやるよ」っていうふうに言った。でも、ちょっとしばらく間があって、テレビカメラはそのまま回ってたんですね。そして、急に泣き顔になって、ねじり鉢巻を取って涙を拭いているところまで撮っていました。その後で聞いた話によると、目の前で仲間たちが苦しんでいるのを見ると励まそうと思うし、よそから来た人が「大丈夫？」って言ったときに「元気」と言う、そういうのは自分は慣れてるんだけど、テレビカメラのレンズに自分が映っている姿があって、ふと、自分はどう捉えたら良いの分からなかったのに気づいて、つい自分のちょっと弱いところが出てしまった、そういうふうに言うわけです。そして、その人は泣きじゃくって、悔しさと、「二個目のボディブロー」と彼は言っていましたけれども、この中でどうしたらいいんだろう、と本当に諦めるという状態に近いんじゃないか、そういうふうな彼の言葉がそこに入っていました。

「砕かれた魂」というこの言葉、この「砕かれた魂」というのはいろんな言い方があります。そして、いろんな姿を取ります。ときには元気はつらつもの、励ましてくれる面白いおじさんという姿を見せながらも、そしてにこにこ微笑んで「よく来たね」って来た人をすごくほがらかにしてくれる、そういう人もいるだろうけれども、でも、そうでない、打ちのめされている、外から来た思いもかけない出来事が起こって打ちのめされている、そういう人たちも「砕かれた魂」を持ちながら生きていこうという人たちであります。そういう打ちひしがれて、人生の途中で何度も何度も打ち砕かれて、打ちひしがれてうなだれている。でも、神はそういう人を見捨てることはない。見捨てることのないどころか、神はそういう人の心を最高の献げ物として受け入れてくれるんだ。そういうふうにイエスはこのたとえの中で主張していると思います。

実は、イエス自身が打ち砕かれた魂そのものでありました。イエス様が十字架に向かう受難と死も、本当に打ち砕かれた姿をわたしたちに示しています。そして、イエス様の、父なる神様への信頼は、祈りは、神様がイエス様を復活させるといって本当に力強く受け止められて、最高の献が物として受け入れられていきます。イエス様が同時代の、そして同世代の打ち砕かれた人たちの味方になった。そういうふうに言うと、その打ち砕かれた心のところから、打ち砕かれた魂を持って生き続けて、前に向くところから神を仰ぐときに、本当の神様の姿が見えてくるよ。だからいつもそういう信仰を失わないようにしよ

う。そして、わたしたちの周りにはいる、打ち砕かれている人々の友だちとなれるように、口先だけじゃなくて、頭の中でそう思っただけじゃなくて、イエス様がそうしたように、行いによって、自分が何ができるか考えることによって、そのことを非難する人たちの言葉に対してわたしたちは答えて行かなくてはならない、そういう義務があるのかもしれない。

わたしたちが打ち砕かれた心を持っているっていうことの強さと、そしてそれに対して何かをすることができるというわたしたちの言葉と仲間を、わたしたちはご聖体から仰ぎたいと思います。